

未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成 ー社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習ー

1 大会主題設定の理由

(1) 社会の情勢及び教育をめぐる動向から

【社会の情勢】

現代は、社会・経済・環境など様々な分野において前例のない変化に直面している。令和3年の中央教育審議会答申(1)においても社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつあることが示されている。新型コロナウイルス感染症の感染拡大やウクライナ侵攻等を目の当たりにした子どもたちも我々大人も、社会の急激で突然の変化を強く実感したであろう。「VUCA」(変動制、不確実性、複雑性、曖昧性)の時代とも言われ、子どもたちが18歳成人として生きていく、今後の未来を予測することは今までよりさらに困難であると言えよう。

【めざす教育の方向性】

子どもたちは、変化が激しく予測困難な未来をどう生き抜いていけばよいのだろうか。令和5年6月に閣議決定された教育振興計画(第4期)では、次のような姿を求めている(2)。

- ・多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える。
- ・未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていく。
- ・ウェルビーイングが実現される社会を、子供から大人まで一人一人が担い手となって創っていく。等

また、令和4年に文部科学省から出された「小・中学校向け主権者教育指導資料『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」では、どのように社会をよりよいものにしていくかを考えること、正解が一つに定まらない論争的な課題に対して自分の意見をもつこと、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わすこと、他者の意見と折り合いを付けること、納得解を見いだし合意形成を図ること等の大切さが示されている(3)。それは、2030年頃の社会を見据えた現行の学習指導要領のめざすところと方向を同じとすることが論じられている。

特に、社会の在り方を学習対象とする社会科においては、主権者教育を意識して、社会の出来事や問題に対して深く考えて意味を見いだすとともに、自分の考えをもち、他者と議論を重ねていくという学びが強く求められる。

(2) 徳島県の研究の経緯から

①大会主題について

徳島県では、長らく三層六段階(右図)の問題解決的な学習を行っている。この学習過程は継承した上で、平成20年度(2008年度)から「明日を拓く子どもが育つ社会科学習」を、平成24年度(2012年度)から「よりよい社会の形成に参画する資質・能力を育てる授業の創造」を主題として研究を進めた。この2つの研究主題は、いずれも「未来」に向けて、そして「よりよい社会の実現、発展」に向けてどのような力を、どのように育むべきかを問うものである。

正解が一つに定まらない社会を生きていく子どもたちには、よりよい社会とはどのようなものか、よりよい社会を実現、発展させるにはどうすればよいか等、**社会の在り方を「考え続けていく」ことが強く求められる。**この点を踏まえ、主題に「**未来に向けて考え続け**」というキーワードを盛り込み、これまでの本県の研究のさらなる深化・拡充をめざすこととした。しかし、前述のように今後の社会は予測困難である。子どもたちが、他者と協働しながら、自分らしさを発揮してたくましく社会を創っていく主体となることを願って、「形成」でも「参画」でもなく、よりよい社会を「**切り拓く**」との表現に思いを込めることとした。

三層	六段階
Ⅰ問題把握	①問題をつかむ
	②予想をたてる
	③調べ方をきめる (見通しをもつ) (学習計画をたてる)
Ⅱ意味把握	④調べたしかめる (ひとりやグループで調べたしかめる)
	⑤みんなで考え話し合う (考え話し合ってまとめる)
Ⅲ発展	⑥ひろげ深める

②大会副主題について <徳島県の過去の副主題の変遷>

平成14年(2002年)～平成19年(2007年)	子どもの 判断する力 の育成に焦点をあてて研究を進めた。
平成20年(2008年)～平成23年(2011年)	子どもの主体的な問題解決的学習の過程に、 判断する場面 を意図的・計画的に設けた社会科学習について研究を深めた。平成22年度(2010年度)には、第48回全国小学校社会科研究協議会研究大会を開催し、全国各地の先生方と研究を深め合った。
平成24年(2012年)～平成25年(2013年)	認識を深める 教師の手だてについて研究を進めた。
平成26年(2014年)～平成27年(2015年)	「問い直し」(分かった、もしくは分かったつもりになっていることに対して、ゆさぶりの問いを投げかける)に焦点を当てて 認識を深める 研究をさらに進めた。

認識

判断する力

【平成28年度(2016年度)から】

社会に対する認識**と**判断する力**をバランスよく育む**

この研究で育む「認識」と「判断する力」は、先に述べたような予測困難な未来の社会を切り拓いていくために必要である。社会の情勢・教育をめぐる動向、そして県の研究の経緯を踏まえ、**徳島県では「未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成」を掲げるとともに、そのような子どもを育成するために「認識と判断する力」に焦点を当てて大会主題を設定した。**

＜大会主題＞

未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成 ー社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習ー



＜めざす子ども像＞

社会の特色や意味などが分かるとともに、根拠や理由をもって自分の考えを決める力を身につけ、他者とともに社会の在り方を考える。そして、未来に向けて考え続け、社会の創り手として、よりよい社会を協働して切り拓いていくことができる子ども。

2 社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習

(1) 「認識」について

【「認識」とはどのようなものか】

ここで言う「認識」とは、用語・語句などの断片的な知識ではなく、特色や意味などの深まりのある知識のことであると捉えている。各種事典等にあたると、知識が「知っていること」「知っている内容」と表現されることが多いのに対して、認識は「意義を理解」「本質的」などの表現が多く見られる。「どこにある？」「だれがした？」「いつ起こった？」など暗記・再生だけで答えるような姿ではなく、「どのように？」「何のために？」のように背景や意図を考えたり、比べたりつなげたりするなどして深く分かる姿をめざす。子どもの言葉で言えば「何のためにしているか分かった」「その地域がどのようなところか分かった」などになるだろう。ここで言う「深く分かる」とは、学習指導要領に示された理解内容を超えるという意味ではない。その理解内容に至るまでの過程を豊かにするということである。ただ、知識と認識という言葉の境は不明瞭で、グラデーションがあるものであろう。「これは知識ではないか」「これは認識ではないのではないか」のように論じることが生産的ではない。子どもが断片的に知ることにと留まらず、社会のことが今よりも深く分かるという方向性を徳島県として共有するため、認識という言葉を用いて研究を進める。

【認識を育む意義】

『小学校学習指導要領解説 社会編』では、「用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計すること」が求められている(4)。用語・語句という表面的なものだけではなく、社会の特色や意味などが分かることの意義がうかがえる。また、「令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査の結果について(社会)【速報版】」では、「社会的事象の特色や意味を考え説明すること」に実践上の課題があることが示されている(5)。このことから、認識を育むことの重要性が見えてくる。

(2) 「判断する力」について

【「判断する力」とはどのようなものか】

ここで言う「判断する力」とは、根拠や理由をもって自分の考えを決める力であり、友達などの他者（社会に生きる人々なども含む）と様々な視点や立場を踏まえて対話し、議論し合う中で育まれていく力であると捉えている（「選ぶ」という意味合いも含む）。地域の方の話や資料の内容、これまでの学習で話し合っただけのこと等を根拠にして理由を考え、自分の意見や立場を決めたり選んだりするのである。社会科の学習で学んだことや社会生活から見いだしたことを活用して、自分の考えの立ち位置を定めたり、いくつかの中から自分の考えに合うものを選んだりする。そして、友達などの他者と話し合い、練り合い、考えを深めていくという学習をイメージしている。

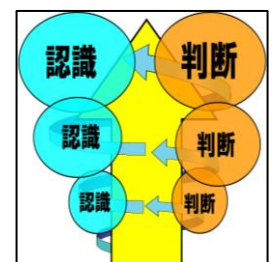
【判断する力を育む意義】

『小学校学習指導要領解説 社会編』では、考えたり選択・判断したりしたことを根拠や理由を明確にして論理的に説明したり、他者の主張を踏まえて議論したりする大切さが示されている(6)。また、鎌田和宏は、「社会科の学習の中で対話することを位置づけ、対話ができ、かつ対話し続ける重要性のわかる子どもに育てて」いくことの大切さを論じ(7)、小倉勝登は、「社会科の学習において、議論したり討論したりということを含めて解決のために話し合うことが課題とすることができる」と研究課題を示している(8)。

さらに、北俊夫は、「判断力は社会の中でさまざまな人や事象などと望ましい関わり合いを創り出していくために必要な能力です。（中略）人生は『判断する』という行為の連続であるといえます」と述べている(9)。予測困難な社会を主権者として生き抜く中で、判断を迫られる場面に無数に出合うだろう。そのような社会を生き抜く子どもたちに、育むべき力が判断する力である。友達などの他者と対話し、議論し合う経験を繰り返していく中で、少しずつ判断する力を育んでいきたい。

(3) 認識と判断する力の関わりについて

徳島県では認識と判断する力をバランスよく育む研究に取り組む。「〇〇は、今後どのようなことを大切にすべきか」等の問いに対して子どもは、身につけた認識を活用して判断する。自分の考えを決め、友達に主張を伝えるために根拠を取捨選択しながら理由を考える過程で認識がより確かで深いものとなる。そして、判断したことを友達と伝え合う中で、自分と友達の考えを比較し、判断がより多角的で合理的なものとなるとともに、多様な視点に気付いて深く分かっていく。認識と判断は、このように相互に関わりながら育まれていく。判断をすることで、身につけた認識が活用されより深いものとなる。認識が深くなると、下す判断もより深いものとなる。このように、子どもの頭の中では、認識と判断が相互に関わりながら成長をしている。分かりながら判断し、判断しながらさらに分かっていくのである。それを繰り返す中で、自分でよりよい判断を下し、未来を切り拓く子どもへと育てていくだろう。



3 研究内容

研究内容 1 単元構想と振り返り

「未来に向けて考え続ける子ども」を育てるには、社会の出来事や問題に関心をもち、その関心や問題意識が連続していくような学習が求められる。小倉は、「その学習活動までにどのような学びが必要か」「その後、どのような学びにつながるのか」を考えておくことの大切さを述べている(10)。前述の「令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査の結果について(社会)【速報版】」でも、問題解決に向けた見通しをもつことに実践上の課題が見いだされる中で(11)、子どもの意識がつながり、自らの学習を調整しながら主体的に問題を追究できるようにすることが大切である。さらには、学習の場(45分の授業、1単元の授業等)を離れても意識がつながり、よりよい社会の実現・発展に向けて、その在り方を考え続ける子どもをめざしたい。1時間1時間の子どもの意識がつながるとともに、子ども自身が自らの学習を調整したり、教師が単元づくり(単元の修正)に子どもの意識を生かしたりすることを見据え、「単元構想」と「振り返り」を組み合わせる研究を進めていきたい。

(1) 単元構想の方策 (子どもの意識がつながる単元にする方策)

① 日常的アプローチ

鎌田は、単元の学習へと意識がつながるために「日常的アプローチ」の重要性を述べている(12)。日常的に、または単元の学習へ入る前に、子どもの関心を高めたり見取ったりすることで単元の学習へ意識がつながるようにする。

- (例)・朝の会で単元の学習に関わることを話題にする。
- ・地図や年表を掲示して活用したり、学級文庫を意図的に並べたりする。
 - ・単元の学習に関わる実物を置く。
 - ・日記や普段の会話から、子どもの関心を見取って、単元づくりに生かす。
 - ・他の単元や他教科の学習を生かす。 など

② 学習問題づくり

鎌田は、「子どもが動く一次教材」として子どもの意識が学習問題へとつながるためのポイントを例示している(13)。解決に向けた切実感や当事者性が高まるとともに、単元の学習(教材、社会的事象等)との心理的距離が縮まり、意識がつながる。そのような出合いができるように、意図的に方向付けていきたい。

- (例)・教材と生活との関わりを実感できるようにする。
- ・曖昧さをつく。(分からなさを実感できるようにする。)
 - ・知的好奇心を高める教材や資料を提示する。 意外性・驚き・考えのズレ等
 - ・比較を行う。 昔と今 徳島と北海道 等
 - ・見学や体験、作業的活動を取り入れる。
 - ・社会的な問題(論争的な問題)と出合えるようにする。
 - ・子どもが発見した教材を活用する。
 - ・社会に生きる人々と出会えるようにする。 など

③予想や学習計画と単元展開

疑問を出し合ったり、予想をしたりすることは、単元の学習を自分に引き付けて考えている時間である。自分の疑問や予想が「本当はどうか」「調べたい」という思いが、単元を展開していく際の推進力となる。この場面を大切にしたい。また、目標の実現を見据えた上で、意図的・計画的な部分と、子どもに任せる部分の両方を考えて展開することが大切である。

○疑問や予想を分類・整理し、学習計画（学習内容・学習方法）へ生かし、見通しにつなげる。

○単元の中に、学習方法等を子どもの意思で選ぶ（任せる）場をつくる(14)。

（例） 1、予想を確かめる資料を選ぶ 2、調べる観点を決める

3、調べる方法を決める 4、調べる順番を決める 5、学習のまとめ方を決める など

(2) 振り返りの方策 （子どもの意識をつなげる振り返りの方策）

(1)の単元構想を具現化する際に重要となるのが、振り返りである。唐木清志は、振り返りについて「今ある学びを次の学びにつなげる意識、つまり学びが連続するという意識を、教師が明確に持つこと」の大切さを示している(15)。自分自身の学び（学習内容・学習方法ともに）を振り返ったり、教師が学びを見取ったりする際の方策を考え、子どもの意識をつなげていきたい。

①振り返りの観点

ア. 自分の学習や変容を自覚する観点

学習前と学習後を比べて、自己評価できるような振り返りの観点(16)を例示することにより、自身の考えの深まりや成長を実感し、自信をもって学習を積み重ねていくことができる。一方で、自分の学習の改善点を自覚することも重要である。その自覚は、自分で自身の学習を調整する出発点となる。

イ. 今後の学習や生活へとつながる観点

これまでの学習の成果と課題を今後の学習や生活へとつなげていく観点(17)である。次の学習へと疑問を深める様子、必要に応じて自分の学習を調整し修正しようとする様子が表れるだろう。また、単元の学習を通して考えたことや感じた思いを記すことで、今の自分の生活とのつながりを実感したり、未来に向けて考え続ける原動力となったりするようにしたい。

②考えの見取りと活用

子どもの考えの見取りを充実させることで、単元の立ち上げに生かしたり、今後の学習へと活用したりすることができる。判断する場面の設定にもつながる。

- （例）
- ・単元の導入前などに、アンケートを実施する。
 - ・考えの立ち位置の変化が見えるようにワークシートを工夫する。
 - ・単元の導入と本時で、同じ問いを投げかける。
 - ・授業後にインタビュー形式の対話を行う。
 - ・毎時間の振り返りシートを用いる。
 - ・タブレット端末の授業支援アプリを用いる。 など

研究内容2 判断する場面の設定

先述のように、「認識」と「判断する力」をバランスよく育む研究に取り組む。研究内容2は、その中核となる場面である。徳島県では、判断する力を、主権者として予測困難な未来の社会を切り拓いていくために必要な力であると捉えている。そして、判断する場面を取り入れることは、主体的・対話的で深い学びを生み出し、学習指導要領の目標を実現するための工夫であるとも捉えている。

(1) 柔軟な場面設定

判断する力は繰り返し経験することで少しずつ高まる力であると捉え、単元の色々な過程において、判断する場面を柔軟に設定する。これは、単元のどの過程でも判断をしなければならないという趣旨ではない。学習指導要領を踏まえた中で、「このような場面でも自分の考えを決める学習をつくれないうか」「学習の後半で少し意見が分かれる場面をつくれないうか」のように、それぞれの授業者の創意工夫を生かして、弾力的に柔軟に判断する場面を取り入れていく。

A社会への関わり方を考える判断（社会への関わり方を選択・判断）

- ・社会に見られる課題を明確に捉えた上で、自分たちに協力できること、解決に向けた社会の在り方などを考える。（実際の取組等からよりよい考えを選ぶことも含む。）

（例）「私たちはどうすればいいか？」「どのような協力ができるか？」「これから何が大切か？」「今は何を優先すべきか？」「これからの社会ではどのようなことを大切にすべきか？」など

B深く分かることにつながる判断（社会の特色や意味などに迫る判断）

- ・どちらかという認識を深める（社会の特色や意味などを考える）ことに重点。
 - ・判断を求めることにより、立場を決めて考え、学んだことを主体的に活用する。
- そして、社会的な根拠や理由を基に友達と対話的に意見を伝え合うことで、考えが多角的になるなど、判断するという学習経験を積みながら認識が深まる。
- ・「賛成？」「必要？」「～と言える？」「問題ない？」「特に～なのは？」など様々。

（例）「伝統的な〇〇が新しく□□することに賛成？」について社会的な根拠や理由を基に判断し話し合う中で、伝統を守る苦勞と、時代に合わせて工夫していることが深く分かる。

C見通しをもつことにつながる判断（今後の学習につながる予想を含む判断）

- ・学習問題をつかむ、予想するなど、単元や授業の導入時に行うことが多い。
- ・前単元までの学習や社会生活における経験から見いだしたことを活用することが多い。
- ・今までの単元で身につけた認識が深まることもあるだろうし、見通しをもって学習を進めていき、単元の後半で認識を深めることにもつながる。
- ・「自分が根拠や理由としたことには何が足りないのか（どんな認識が不足しているのか）」「自分が判断したことが本当にそう言えるのか確かめたい」のように子どもが自身の認識や判断に対して課題意識を感じ、以降の学習への見通しをより明確にもつことや解決への意欲を高めることにつながる。それもまた認識と判断する力を育むことに寄与すると考える。

（例）「（前の時代の学習を踏まえて）新しい時代に取り組むべきことは何か？」ということ、予想を含めて判断し話し合う中で、「本当に〇〇なのか調べたい」「自分は、特に〇〇に注目して調べていこう」など今後の学習の方向性を見いだす。

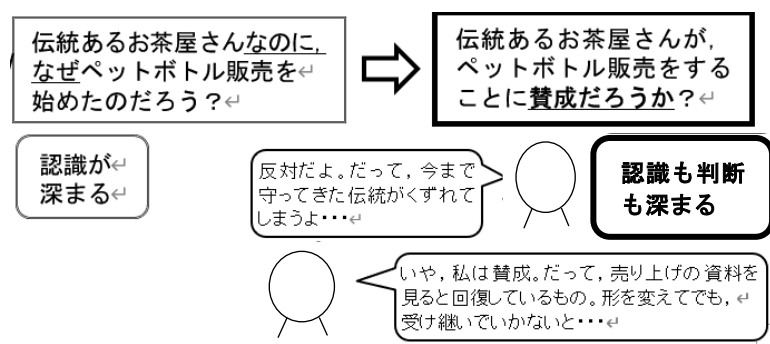
Aは学習指導要領で示された判断、B・Cは徳島県独自の判断として整理している。大きく3つに分けているが優劣はない。また、1時間まるごと判断を話し合う学習だけではなく、学習問題をつくる中で少し対立を取り上げる、調べたことを基に少し意見のズレを取り上げるなどの形で判断する場面を設定することもできる。これも柔軟な場面設定の一つである。

大切なのは、その時点まで身につけた認識（前單元までに身につけた認識や社会生活における経験も含めて）を精一杯活用し、現時点のその子なりに全力を尽くして判断ができるようにしていくことである。柔軟に判断する場面を設定し、現時点の認識を精一杯活用し判断するという学習経験を繰り返していくことが、認識と判断する力を育むことにつながる。なお、ここでいう判断する場面は、「学習内容」について子どもが決めたり選んだりする場面である。学習方法等について子どもが決めたり選んだりすること（まとめ方を決める、資料を選ぶなど）は、判断という呼び方はせず、研究内容1の一つとして研究を深めたい。

(2) 判断への意欲を高める工夫

教師側から唐突に「このことについて話し合ってみよう」「このことについてどちらかを選んでみよう」と促すのではなく、子どもたちが「このことについて友達と話し合いたい」「みんなの意見を聞いてみたい」となるような「判断への意欲を高める工夫」について研究を進める。判断への意欲を高める手だてを講じることで、「判断をさせられる」のではなく、主体的・意欲的に自他の考えを伝え合う姿をめざしたい。

澤井陽介は、『伝え合わざるを得ない』状況をつくることです。（中略）子供を『困らせる』こと、『迷わせる』ことです。と述べている(18)。そのための一つの手がかりとなるのが、徳島県でこれまで取り組んできた「問い直し（分かった、もしくは分かったつもりになっていることに対して、ゆさぶりの問いを投げかける）の発想を生かすこと」である。「～するべきか?」「～は問題ないのだろうか?」「どちらがいいのだろうか?」「本当にそう言えるのだろうか?」などの問いを投げかけることにより、友達と協働的に話し合う中で、認識が深まるとともに、判断する力が育まれていく。



鎌田(19)及び、加藤寿朗(20)、由井蘭健(21)の論や県の過去の研究を受けて、判断への意欲を高めるために次の要素（例）に注目する。

- 矛盾** 社会的事象と自分の考えのズレに気付き、「あれ?」「～のはずなのに変だよ?」のように知的な関心をもち、判断への意欲が高まる。
- 対立** 2つが反対の立場に立つことで、「～という考えに反対だよ!自分の主張を伝えたい」「相手の主張を聞いてみたい」のように、判断への意欲が高まる。
- 葛藤** 心の中に相反する思い・考えが芽生え、「どれを選んだらいいのか…決めきれない…」「どう結論を出したらいいのか」のように迷いが生じ、判断への意欲が高まる。
- 相違(ズレ)** 友達との考えの違い・ズレに気付き、「自分と友達、それぞれ違う考えだ…どれがいいかな?」「友達はどうか考えたか聞きたい」のように、判断への意欲が高まる。
- 情意(感情)** 社会に生きる人々や教材中の人物などの不安や悩みなどに「何とかしたい」と共感したり、社会で起きている(起きた)問題を知って「ひどい!」「おかしい!」と感情がゆさぶられたりすることにより、判断への意欲が高まる。
- 課題の明確化** 学んできた「社会に見られる課題」について、「特にどこが大きな課題なのか?」や「解決すべき方向性は?」「課題のここに注目すれば…」のように、課題を明確にすることにより、解決への見通しを得ることができ、判断への意欲が高まる。

これらは、大まかに分類したものである。混ざったり組み合わせたりすることで意欲を高める効果が得られる場合もある。そして、これらは判断への意欲を高める手だてになると同時に、教師の教材研究(教材化)の視点ともなり得る。問いが本当に子どものものとなるかを考えて場面を設定することが大切である。子どもの疑問や思いをしっかりと引き出した上で、場面を設定していきたい。



研究内容3 考えを深める手だて

感情的な話し合いで終わるのではなく、社会科らしい学びとなるように社会的事象の「見方・考え方(空間・時間・相互関係等の追究の視点、比較・分類・総合・関連付け等の追究の方法)」を意識することが重要である。「見方・考え方」を意識して手だてを講じることにより、特色や意味を見いだすことができたり、問題点や論点を明確にし、様々な立場から多角的に考えることができたりするなど、子どもの認識や判断をより深めることができるようにしたい。

子どもたちが主体的に話し合いを進めていく中で、「ここぞ」という教師の出どころを見定めて、意図をもって見方・考え方を意識した手だてを講じ、考えを深める。見方・考え方を働かせる学習経験を積み上げたり、学習を経て新たな視点を見いだしたりするなどして見方・考え方を鍛えていく。そして、最終的には子どもたち自身が見方・考え方を活用できる姿をめざしていきたい。

(1) 発問・言葉かけ

考えを深める手だての中核となるのが発問・言葉かけである。「ゆさぶる」「焦点化する」「整理する」「一般化する・具体化する」などは、子どもが自らの考えを立ち止まって見直す、別の視点や立場から考える、本質的な部分へ迫る重要な発問・言葉かけである。以下は一例である。より豊かなバリエーションを見いだすとともに、後に示す「資料提示」等の手だてとの組み合わせも考えていきたい。

・別の視点から考えられるように… ・意欲的に本気で考えられるように… ・さらなる議論を生むために…	①ゆさぶる 矛盾することを問う、曖昧な点を問う、あえて反論したくなるように問う
・1つの視点から深く考えていくように… ・授業の核心やまとめに向かっていくように… ・理由や意味を考えられるように…	②焦点化する 特に注目すべき視点にしばる (大事な部分に子どもの考えを向ける)
・他の事例に広げて考えていくように… ・複数の事例から共通点をまとめるように… (例：寒い地域、低い地域に共通する特色)	③具体化する 例えば？ 他の例は？ など 一般化する つまり？ 共通して言えるのは？ など
出た意見を整理して次の展開へつなげるために… (分類 対立点 共通点 違い 立場などを整理)	④整理する 出た意見はどう分けられそう？ など
・友達の意見に対する考えを言えるように… ・子どもの意見を他の子に広げるように… ・子ども同士で意見をつなげていくように…	⑤子ども同士をつなぐ ・〇〇さんの意見をどう思う？ ・今の2人の意見はどう違う？ など
・学んだことを根拠や理由に発言するように… ・考えの背景や経験を掘り起こすために…	⑥確認する ・どこからそう考えたの？ ・どうしてそう思ったの？ など

(2) 資料提示

「発問・言葉かけ」の発想を生かして、資料を提示したり焦点化したりゆさぶったりして思考を促したり、新しい情報を提示して考えを深めたりする。教師が意図をもって、提示する資料を精選する。

「位置や空間の広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」などの追究の視点を意識して地図、年表、関係図などの資料を提示することにより、見方・考え方を働かせ、議論をする際に活用できるようにする。ICT 機器も活用すると、一部を拡大したり、焦点化したり、隠したものを提示したりして、より効果的な資料提示となる場合がある。デジタルの（ICT 機器を活用した）資料とアナログの資料を使い分けていきたい。

(3) 板書

ICT 機器を用いた学習が増えたとしても、一覧性（広いスペースで、全体像を見渡せる）や保存性（情報を消さずに 45 分間残すことができる）などに優れた板書は、これからも大事な手だてであるだろう。特に判断する場面において、次のような板書の方法が考えられる。

（例）・対立する意見を左右に書き分ける

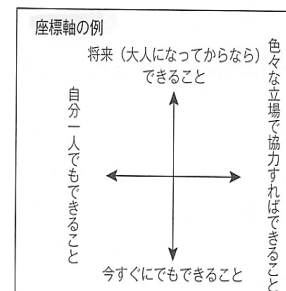
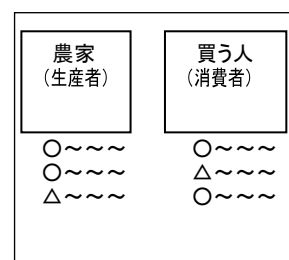
- ・賛成の度合い（考えの立ち位置を表す） 0～100 のうちのあたにか
- ・キーワードを囲んで焦点化し、共通点や相違点などを問いかける
- ・関連するものを色々な矢印でつなぐ（細い・太い・片側・両側など）
- ・思考ツールを板書上に表現する（Y チャート、X チャート、ベン図など）

議論の流れや対立点が目に見えるように板書をすることで、友達の意見と比べて自分の考えを深めたり、対立点を踏まえて建設的に議論を進めたりすることにつながる。(2)の資料提示と同様、デジタル（ICT 機器）とアナログ（黒板）、両方のよさを意識して使い分けていきたい。

(4) 視点や立場の明確化

判断して話し合いを進める際、意見の出し合いに留まっては学習が深まらない。唐木は、「提案した中身と根拠を子どもが相互に吟味をすることが必要である」こと、「吟味の過程で、根拠がより明確になって提案もますます現実性を帯びるようになり、子どもの社会認識は深まっていく」ことを述べている(22)。必要に応じて、**視点や立場を明確にして考えを練り合っていくことが大切**である。

右図（上）のように「農家（生産者）」と「買う人（消費者）」それぞれの立場から意見を考えることや、「家庭で」「地域で」「消防署と協力して」火事を防ぐためにできることをそれぞれ考えることなどが例として挙げられる。また、澤井は「それによりどの課題が解決するか（実効性）」「誰がすればよいか（主体）」「本当にできるか（実現可能性）」などの視点や、右図（下）のような座標軸の例を示している(23)。



県内の研究においても、「町のよさは伝わるか」「実現可能か」「どちらの立場に立ってもよい方法か」という3つを基にそれぞれの考えを相対化し、練り合う学習が提案されている。そのように話し合いに生かした視点等は、今後、子どもたちが自分自身で考えを深めていく際に活用できるものへとなっていくだろう。

他にどのような視点や立場が考えられるか、それを授業の中でどのように示していくのか（どのように発問・言葉かけや板書などの工夫と組み合わせていくか 等）について今後研究を進めたい。

<引用・参考文献一覧>

- (1) 中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』2021年、p. 3
- (2) 「教育振興基本計画（第4期）」2023年6月閣議決定、pp. 8-10
- (3) 文部科学省『小・中学校向け主権者教育指導資料「主権者として求められる力」を子どもたちに育むために』2022年、p. 1
- (4) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』2017年、p. 8
- (5) 国立教育政策研究所「令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査の結果について（社会）【速報版】」2024年7月
- (6) 同上（4）、p. 141
- (7) 鎌田和宏『小学校新教科書ここが変わった！社会』日本標準、2020年、p. 19
- (8) 小倉勝登『問題解決のために話し合う』学習活動の充実』『初等教育資料』東洋館出版社、2023年8月号、pp. 48-50
- (9) 北俊夫『「なぜ？」で学習指導要領を読み解く社会科授業のヒント』文溪堂、2020年、p. 30
- (10) 小倉勝登『社会科授業づくりは「単元で考える」』明治図書、2023年、p. 104
- (11) 同上（5）
- (12) 鎌田和宏「未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもをどう育てるか～子どもを中心に据えた授業づくりを考える～」徳島県・徳島市・海部郡社会部会夏季研修会講演資料、2023年8月1日及び『未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子ども』を育てる授業づくり」沖洲小学校校内研修講演資料、2023年8月2日
- (13) 同上（12）
- (14) 澤井陽介『澤井陽介の社会科の授業デザイン』東洋館出版社、2015年、pp. 156-157
- (15) 唐木清志『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』東洋館出版社、2023年、p. 155
- (16) ア、自分の学習や変容を自覚する観点の例

（例）○学習内容についての振り返り

- ・分かってきたことは…
- ・予想と比べて…
- ・自分の成長を感じた点は…
- ・いいなと思った友達の意見は…
- ・学習前は…学習後は…
- など

○学習方法についての振り返り

- ・自分が選んだ資料は…
- ・自分の調べ方（考え方、話し合い）を振り返ってみると…
- ・これまでの学習の調べ方を（考え方）を生かして…

[今までの学習の調べ方や考え方を生かした場面はありましたか？]

- (17) イ、今後の学習や生活へとつながる観点の例

（例）○学習内容についての振り返り

- ・次に解決すべきことは…
- ・調べる中で、新たに出てきた疑問は…
- ・これからの学習で、さらに調べるべきこと（考えるべきこと）は…
- ・話し合ったらよいことは…
- [これからの学習で、みんなで話し合ったらいいと思うことは？それはなぜ？]
- など
- ・家の方と話し合ってみたいことは…
- ・これから自分の行動で意識していきたいことは…
- ・自分がこれからも考え続けていきたいことは…

○学習方法についての振り返り

- ・次に自分が使いたい資料は…
- [次にどのような資料を使えば、解決に近づきそうですか？ それはなぜ？]
- ・これからの学習で調べる方法は…
- まず… 次に…

[まずどのような方法で調べますか？次にどのような方法で調べますか？]

- (18) 澤井陽介『教師の学び方』東洋館出版社、2019年、p. 50
- (19) 同上（12）
- (20) 加藤寿朗「認識と判断を深める子どもの育成－教育課程の動向を踏まえて－」徳島県・徳島市社会部会夏季研修会資料、2016年8月10日
- (21) 由井蘭健『「深い学び」をつくる社会科授業 3年』東洋館出版社、2019年、p. 20
- (22) 同上（15）p. 156-157
- (23) 澤井陽介『本当に知りたい 社会科授業づくりのコツ』明治図書、2022年、p. 51